Title	一自閉症児に試みた箱庭療法
Author	岩堂, 美智子 / 阿原, 靖子
Citation	大阪市立大学家政学部紀要. 17 巻, p.149-157.
Issue Date	1970-02
ISSN	0473-4742
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学家政学部
Description	

Placed on: 大阪市立大学学術機関リポジトリ

Placed on: Osaka City University Repository

一自閉症児に試みた箱庭療法

岩堂美智子・阿原　靖子

A Trial of Sand-Play Technique with an Autistic Child

By Michiko Iwadô ahd Yasuko Ahara

序　　文

1929年に Lowenfeld[5] が遊戯療法の手段の一つとして考案した箱庭療法（Sand-Play Technique）は，その後彼女に教えを受けた Kalff[2] により，その発展をみた。我が国においては，その Kalff の指導を受けた河合隼雄[3][4] により，1965年から京都市カウンセリングンターおよび天理大学において用いられはじめ，児童や成人の心理治療に注目すべき効果をあげている。

これは，人，動物（家畜，猛獣），植物，乗物，家その他の建物，柵などのミニチュア玩具を用意し，クライエントに，適当に玩具を選ばせ砂を入れた箱の中に何らかの表現をさせるものである。

Lowenfeld は，箱庭に表現されるものは，その人の内的世界を表わすものであると考え，十分にクライエントの Primary Thought が表現されることが治療の根本となるといった。一方，Kalff は治療者とクライエントの関係の重要さを強調し，Mother-child unity といい得る一体感に支えられて表現されたクライエントの「世界」からこそ自己実現の可能性が芽生えると考えた。さらに河合等は，こうして出来上がった作品を Jung[1] のいう Image としてみていこうとしている。

さて，自閉症児に対する治療的接近の方法としては，従来の遊戯療法の他，音楽療法，[6] 家庭訪問治療などさまざまの新しい試みがなされており，同時に親のカウンセリングの重要性が叫ばれている。

箱庭療法は，自閉症児のうち，特に Kanner type の者には，材料の玩具が壊れやすくまたその入手が困難なため不適とされ，クライエント自身も「箱庭」を作るということにほとんど興味を示さないので治療手段としてこれを用いている例は少ない。

われわれは，Asperger type と思われる一自閉症児に対し箱庭療法を試みたところ，興味ある結果を得たので，これを報告し，「箱庭」に表現された自閉症児の内的世界の解明を企てつつ，その治療的意義を考察したいと思う。

目　　的

Asperger type と思われる一自閉症児の遊戯療法に，箱庭療法を導入した結果を，母親のカウンセリング・プロセスとあわせて考察し，自閉症児の自己表現の諸特徴とその変化の過程を明らかにする。

クライエントについて

（1）**事例**：J.M. 男子　10才

（2）**主訴**：3才11ケ月の時，落ち着きがない，友達と遊べない，臆病である，ことばの発達が遅いなどの問題をもって市大家政学部児童相談室へ来所。（それ以後現在に至るまで遊戯療法をうけている。）7才3ケ月の時，K大学病院で小児自閉症の疑いありと診断される。

（3）**生活環境および対人関係**：

♂父（大学教授41才）——♀母（36才）
└ ♂本児（10才）

出生時より1才8ケ月まで，父は海外留学のため不在，母と二人きりの生活をする。母はことばの発達が遅いので精神薄弱児ではないかと疑っていたが，要求に応じて母が読んで聞かせた絵本の文章をスラスラと暗誦して言ったことがある。2才頃一人で二・三度外に出て遊んだが，友達に叱られてから外に出ようとせず，室内でのみ遊ぶようになる。同じ玩具をいつも持ち歩いたり，半年以上も同じことをくりかえして遊んだりする。

幼稚園では集団行動ができなかった。6才3ケ月，普通小学校に母親付き添いということで入学。入学当初は級友には無関心で，いつも学級文庫の本を読んだり絵を描いたりしていた。後に本児一人で通学が可能になったが，次第に時間かまわず自分勝手なことを先生にむかっ

て発言し，学級の他の児童の勉学を妨げることが多くなったので9才3ケ月の時，養護学校に転校する。養護学校では担任教師の個別的な指導をうけ，他の精薄児に比し学習成績は抜群，優等生となる。父母ともに口数少ない学者タイプの人で，家庭もそういう雰囲気である。なお，7才5ケ月より本児の家庭へ週二回生活指導（後に家庭訪問治療として確立される。）のため児童学専攻の大学院学生が訪問を続けている。

治療の実際

（1）Sand-play 導入前のJ君の行動像*

第1表

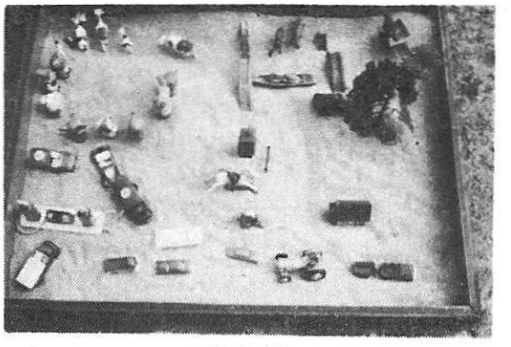
期　　間	治療回数	therapy の特徴	J　君　の　行　動　像
1967年4月～8月	17　回 （一回40分）	play theapy 主に，泥遊び，水遊び，チャンバラ，劇遊び，本読みなどをする	• th と徐々に信頼関係を作りあげていく。 • play 場面で，まだまだ緊張している。 • 表情に乏しい。 • 講談調の奇異なイントネーションで話す。 • th を無視している時がある。 • 唐突な問いかけが多い。 • 応答がスムーズにいかない。
1967年9月 ～1968年2月	13　回	音楽（piano 即興演奏）をとり入れたplay therapy 主に，劇遊び，物語の創作，ダンスなどをする。	• 概して発揚的。 • pianist にも働きかける。 • はじめは拒否的な態度をとっていたが，次第に音楽を受けいれるようになる。
1968年4月～7月	11　回	play therapy 主に，本読み，絵画，泥遊びをする。	• いすに座っての静かな play が多い。 • たまに，日常の出来事などを th に話したりする。 • th と少し情緒的なやりとりができるようになる。

（2）Sand-play 導入後の遊戯治療過程

第1表のような過程をへて，クライエント（以下 ch と略す）は1968年9月より「箱庭」をとり入れた play をはじめるようになった。これは現在なお続行中であるが，ここでは一応1968年9月～1969年7月までの期間（治療回数21回）をとりあげて，その間の変化の過程を追ってみたい。

第1回（1968，9，14）

「箱庭」の材料を見て興味を示し，すぐ作りにかかる。まず中央に五重の塔を置く。続いてその横に赤い鳥居を置く。左手前半分の位置に，ガソリン車，ブルドーザー，救急車，乗用車それにガソリンスタンド，交通標識などを置く。川を右手前から左上部へ，箱を横断するように作る。左の方は海につながっているのだという。右の方は三つに分かれていて，その分岐点に一つ橋をかけ，分かれて流れている二本の川にも橋をかける。川には舟を浮かべ，水を飲みにきている馬や牛を置く。海辺にかに，少し離れたところに灯台を置く。川の近くにカエルの「ケロヨン」とその仲間たちを半円形に並べる。牧場に遊びにきているのだという。右手中央には木と家を一つ置き，その傍におまわりさんを二人立たせる。最も長い川の上流に水車小屋を置く。箱の中央やや手前に，馬に乗った男を郵便屋さんだといい，バス停の標識の傍



第1図

* 筆者の play therapy 担当後，Sand-play をとり入れるまでをいう。

には座像のおじいさんを，切符売りのおじいさんとして置く。治療時間いっぱい箱庭作りに興じ，終了するとやや興奮して母のいるカウンセリングルームにとんで行き，「母さん，見て！僕の箱庭」と誇らし気にいう。自動車の往来する街の風景と，牧歌的な川辺の風景が一つの箱の中に同居しているが，不自然ではない。全体にのどかな感じである。（第1図）

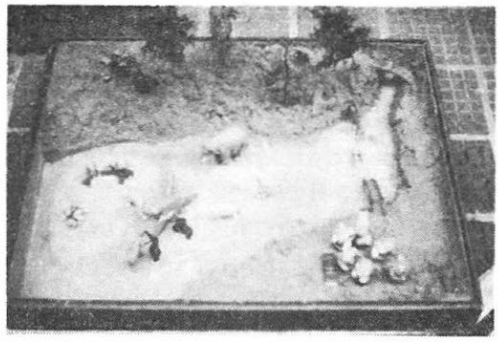
第2回（1968，9.21）

先週帰り際，「今度は戦争ごっこをしよう」といっていた通りに，来室するとすぐ玩具の中から，ゲリラやインディアンなど戦う恰好をした人間を選び出して，箱の右半分に置いていく。戦車のたぐいも置く。「こいつが撃って，これがやられるところ。うーん，やられた」と物語の人物になったように遊びながら作る。右手下部から左手中央部にむかって流れる川を作る。前回よりやや幅が広い川である。川のあちこちに橋をかける。左手の方は海で，そこには舟を浮かべる。この海に沿って小さな木を植え，左手の部分一体に釣人や農夫などを配置し，そこに海に向けてケロヨン達を前回と同様ずらりと並べる。この左手の世界は平和な世界だという。「ここはどこ？」と問うと，「日本の，平和な村」と答える。ケロヨン達は戦争の国アメリカから逃げてきたのだという。一方，箱の左端中央部に海の中に小さな島を作り，白熊を一匹置く。北極に熊がいるところだという。村作りの際，なかなか砂を小高く盛ることができないでいるので，セラピスト（以下 th と略す）が水で砂を湿らせることを教える。今回は箱庭遊びの後，10分ほどの残り時間を紙芝居用の図画を見て過す。この回は戦いの場面に時間をかけ，力を入れて遊んだ。戦争と平和という二つの世界は，でき上がりを見ると，対比させられているようだが，後者は前者のしめくくりとして，あるいは休憩として置かれたようである。北極熊の説明は，ふと置いてみたものを何とか理由づけようとする，分裂症患者のロールシャッハ反応に見られる傾向に似た，一つのあらわれともみることができる。

第3回（1968，9.28）

今回も予告通り，「自然動物園を作るんだ」と早速製作にかかる。前回，砂を湿らせることを覚えたので，徐々に砂を湿らせ，箱のまん中に右から左へ流れる箱の三分の一ほどの面積を占める大きな川を作る。川に少しほんとうの水も流す。川のまん中に，象，トラ，ライオン，キリン，ゴリラなどを置き，それら野獣にワニを囲ませる。「どういうところ？」「ワニが象に足を踏まれたので，怒って象を噛んだんだ。それで皆がワニをこらしめているところさ」川の中左手に少し砂をまき，花を植えて沼地を作る。川の上流には橋を二ケ所かける。その一つは中継地でつながれて三つ連続した大がかりな橋である。上手の岸には，多くの木を植え，みかんの木のまわりにサルを置いて，みかんを食べているところだと説明する。下手の岸にはケロヨン達が，はるばるアフリカのこの自然動物園を見学に来ているところだと，彼等と彼等の乗ってきた自動車を置く。今回の「箱庭」は，やや多い目の水を使用したので，泥遊び的要素が強かったが，遊びが小手先ですまされることなくダイナミックにおこなわれて，作品が力強いものになった。（第2図）

第 2 図



第4回（1968,10,12）

第5回（1968,10,26）

この二回は ch が終了時に作品を壊してしまったこと，「火山」をテーマにしたことで，いずれも共通しているのでまとめて報告する。「火山が爆発して，溶岩が流れ出ているところを作るんだ」と，右手上隅に砂を高く積みあげる。第4回はまん中に左右に流れる幅広い川を作り，岸に木々を植える。川には二つつないだ橋をかけ，いったん山のある方の岸に6人のケロヨン達を並べたが，「火山が爆発しそうなので，あわててケロヨン達は逃がれる」と手前の岸に位置を移す。「もう安心，ケロヨン達は川のむこうで火山を見物する」と説明しておいて，何度も火山を壊したり，再び砂を積みあげたりくりかえす。第5回は，川のかわりにだ円形の湖を作ったのが異なるだけで，火山を見物するケロヨン，爆発をくりかえす火山など，ほぼ4回目と同様であった。最後に溶岩でみんな埋もれてしまった……と砂を平にならして，ほとんどの玩具を箱の外に出してしまい，母親にも，「今日はもうみんななおしてしまったよ」と告げ，これまでのように「見て！」とひっぱりはしなかった。

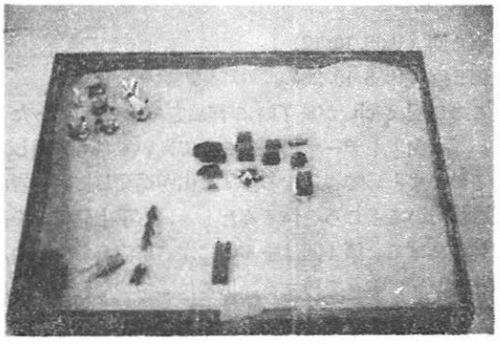
この二回は，使用した玩具数も少なく，主として砂遊びを楽しむように，もっぱら山をこしらえたり壊したりすることに熱中した ch であった。これは，以前泥遊びで，泥をかきまわした後，陸地を次々作っていった時の遊び方に似たものであった。

第6回（1968, 11, 29）

第7回（1968, 12, 6）

研究室移転で約一ケ月のブランクの後，新築の play room へ ch 来室。新しい室内に関心を示しながら，「待ち遠しかったよ」と早速箱庭製作にとりかかる。この第6回，第7回は湖を干拓し，宅地造成をするという意味深い sand-play をくりかえしおこなったので，これも二つまとめて報告する。第6回は「八郎潟」，第7回は「びわ湖」を干拓し，徐々に水をなくしていって埋め立て地をふやす遊びを入念におこなう。湖は，細い，蛇行する川として残し，でき上がった土地には一軒家や，角型ブロックを積んだ団地の鉄筋住宅を建てる。田んぼも作る。この二回とも，干拓工事に非常に時間をかけ，徐々に埋め立て地をふやす作業をくりかえしおこなった。建物群はその後で無造作に置いたので，でき上がった作品をみると簡潔な感じを受けるが，力作である。（第3図）

第 3 図



第8回（1968, 12, 20）

「びわ湖を作る」と大きく砂を移動させて湖を掘り，四つの橋を一直線につないで大橋にする。橋と橋のつなぎ目には小さい島を作る。湖の周囲に，五重の塔，お宮，家々を並べ，湖岸を半円形に自動車の類で囲む。右手上隅にケロヨン達がびわ湖見物に来ているところだといって，以前と同様自動車一台と共に彼等を配置する。右手前の部分に小高い丘を作り，その頂上に灯台を建てる。今回は湖を埋め立てることをせず，自分の記憶にある風景を箱庭で表現したというような作品になった。前回の簡潔さと違ってでき上がりがにぎやかである。連続している自動車の列が作品に活気を与えている。

第9回（1969, 1, 17）

新しく玩具棚に加わったオランダ娘の人形を見て，「オランダの国を作ろうかな」という。運河だと，左端から右手前の方に流れる川を作る。手前側にいつものケロヨン達や小さなカエル君達を輪に並べ，オランダ娘を彼等のお母さんだよといってその中心に置く。

一方，川には舟を浮かべ，ワニから順に，野獣類，家畜類を川の中および向う岸にところ狭しと並べていく。手前の岸のケロヨン達のなごやかさとは対照的に，この大量群の動物達は雑然として統一がとれていない。

第10回（1969, 2, 7）

前回，チラッと「次はスキーしているところをしよう」ともらした通り，入室するなりスキーをしている人形を捜す。砂を正面手面に高く積みあげて，「ヒマラヤにスキーに来ているんだ，ケロヨン達」と山の向う側にケロヨン達を並べる。スキーをしている人間を山の斜面であちこち移動させるが，やがて「この山，富士山にするよ」と今度は場面を日本に移す。山の周囲に富士五湖を作るといって，川でつながっている湖を左右に作り，水鳥やかにを水辺に置く。湖の傍には五重の塔，お宮，家が建ち，橋を自動車が渡っている。前半，活動的なスキー場であった箱庭が，終了時には，こぎれいな観光地になった。

第11回（1969, 2, 21）

「鉄塔を作ろう。材料はないかな」プラスチックのブロックを棒状につなぎあわせて，水で湿らせた砂の上に四本つきさす。それを柱にして，25cm四方ぐらいの金属製の箱のふたをその上に載せ，やがて柱を三本にして，ケロヨン達を置く。そのうちの一人ネコ君に鉄塔の一本をゆすらせ，やぐらを壊したりまた建てたり，上で仲間どうしにすもうをとらせたりする。鉄塔のうしろ側に，長方形の積木を二つ重ねて簡略な家にし，父母にみたてた人形を置いて，ここがケロヨン達の家だという。おわりになって，柱を全部とりのぞき，その跡を子どもたちの遊ぶ砂場に設定する。この鉄塔のシーンとは別に，左側三分の一に，途中で，前回とよく似た湖のある風景を，ふと思い出したように作る。「これは，前作ったのと同じ，富士五湖の一つ。河口湖にしようかな」という。ケロヨンの仲間のやりとりを演じる ch は，まるで日常場面での自分の発言のように感情をこめている。

第12回（1969, 2, 28）

第13回（1969, 5, 9）

この二回は，二ケ月余の間隔があいていたにもかかわらず，ちょうど初回の作品の変形のようで両回に共通点がみられた。湖，川，橋，家々，水鳥，木々，往来する自動車，列をなす自動車，ケロヨン達の集団。変化に富んだ筋書きをつけながら作っていくというのではなく，淡々と郊外地風景を作りあげる。ほっと息ぬきのできるような作品である。12回では，道路が斜めではあるが，ほぼ十字型になっているのが注目される。また，13回では，一列に並んだ車が，下から上にむかって出動していく，何かの力を示しているようである。この時期は，大学紛争激化の折で，そのため休みが長かったのであるが，ch も大学の封鎖事件や学生運動の話題に関心を示し，play の合い間に，しきりにその話題を ch に投げかけ，不安そうな表現をした。

第14回（1969, 5, 23）

第15回（1969, 5, 30）

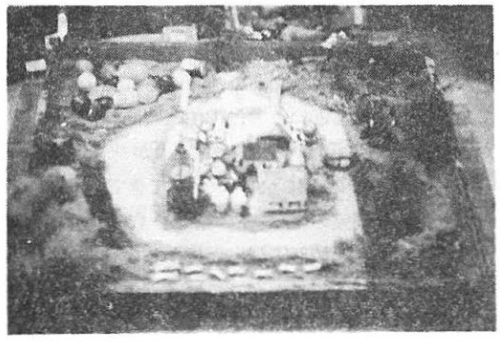
「時計台に赤い旗があったよ」「今日は大学静かだね，みんなデモに行ったの？」などひとしきり不穏な大学の話題をおしゃべりした後，箱庭製作にとりかかる。第14回から作品の傾向がまた変化を示した。この二回は各々，「印旛沼」「霞ケ浦」の干拓から箱庭遊びを開始し，湖を徐々に埋めて，排水機，トラクターで着々と土地を作りあげていく順序は以前と同様であったが，後半，でき上がった新しい土地を種々のパラダイスにしたてていったのである。まず左上半分を，「ここは果樹園だ」といって果物類を並べる。左下手前には木をたくさん置き，「植物園」にする。右手は「遊園地」で，ブランコ，花のアーチ，スベリ台を置く。その横には「ぶた園」を作り大ぶた小ぶたをたくさん並べる。最後にケロヨン達を登場させ，色彩あざやかにでき上がった箱庭を眺めて，自分から「良いだろう，きれいだろう」と満足気にいう。干拓地がいろいろなものに利用されたところなのだという。作品ができ上がった後，二回とも三輪車に乗り，表に出ていく。表の石廊下を往来する。久々に終了後母親の手をひっぱり，自分の作品を見せて説明したのもこの回であった。排水機として利用する玩具は，飛行機や電話器である。地ならし用の車としてトラクターでなく乗用車を使うこともある。ch は，それらを「電話器型の排水機」などとこじつけて使う。

第16回（1969, 6, 6）

第17回（1969, 6, 13）

この二回も，ch の夢をあらわしたような作品が作られた。テーマは前回と同様で，全体の構図が変わってきている。16回はドーナツ型に堀が作られ，やや図形的であるが，まん中の島がケロヨン達がいかにも楽しそうに遊んでいる遊園地となり，建物の数もふえ活気に満ちている。島には橋がかかっており，周囲には種々の「園」がある。そこに新しく開拓村と ch が名づけた村落ができた。17回目の方は「浜名湖」を中心に，城やタワーのある遊園地，水泳場のある遊園地，と二つに遊園地が分かれ，果樹園も二手に分かれて作られる。湖には弁天島その他の島を作り，養魚場も作る。地形の表現に凝る。でき上がった作品は非常にカラフルで見て楽しいものである。両回とも，箱庭を作り終えてから，指人形を使って人形劇に興じた。箱庭は静かに作っていた ch であるが，人形劇遊びではかなり発揚的になり，姫人形を奪いにくる男と，それを拒む男の劇を，もっぱら自分一人で台詞をしゃべりながら，アグレッシヴに演じた。

第 4 図



第18回（1969, 6, 20）

この回は箱庭を全く使わず，人形劇と三輪車乗りで時間を終えた。th と一緒に人形劇の舞台裏に入り込み，指人形の他，いぬ，サルなどのぬいぐるみ人形を集めて，次々ストーリーを作っては演じていく。戸外を学生デモ隊が通るのを見て，「機動隊と反日共系の争い」を主テーマにして人形たちを動かす。th を相手役に求める時と，一人で二役演じる時がある。食事用のままごとナイフで一方を突きさすといったアグレッシヴな場面もくりかえす。口にする台詞は，以前（2年前）ごっこ遊びをしていた時のオーバーな講談調に比し，ごく月並みになってきた。

第19回（1969, 7, 4）

実験のため箱庭用玩具が他へ運ばれていて，play room に少数しか用意されていなかったこの回，ch は，もっとおもちゃがあれば良いのに……といいつつ，両手で砂を水と混ぜあわせ，納得いくまでそれをくりかえす。そうした後，びわ湖，ひえい山，そしてその近辺を作りはじめる。「僕，ここに登ったことあるんだよ，歩

いて。五月にお母さんと行ったんだ」と話しながら作る。指で砂にすじをつけ，湖西鉄道だという。後半は三輪車に乗ったり，クレヨンで絵を描いて遊ぶ。赤，青の帆をつけたヨットの浮かぶ山中湖があり，そのまわりを富士山と他の火山が囲んでいるもの，噴火中の火山がたくさん並ぶ火山帯，まん中に小さい火山の浮ぶ摩周湖の三枚である。絵を描きながら，同級生が寄り道をしたため，担任の先生に叱られていたのを見てかわいそうだったという話をする。今回の箱庭は砂いじり的に終ったが，会話に不自然さが見られなくなった。

第20回（1969，7,11）

番　外（1969，7,18）

第21回（1969，7,25）

最近のこの三回は，今までの箱庭の内容がより現実的になってあらわれてきているものといえる。利根川，児島湾などと命名した川や湾を，干拓していって遊園地や果樹園を作るのだが，川や入江として残される水の部分が，入りくんだ複雑なかたちであらわされ変化に富んできている。「番外」というのは，治療時間外に，たまたまかって ch の生活指導をしていた人が来所した際，ch が母と共にその人に会いにやってきて，カウンセラーや母親など同室のところで箱庭を作ったものである。この日は臨海学校から帰ったばかりの日で，早速箱庭に，見てきた紀ノ川にかかっている鉄橋をとり入れて作った。この回は，トッポジージョとロージーの人形を川辺に置いた。またこの時はじめて，川を箱の上下に流れるように作り，積木と砂で作った大きな橋と，それがちょうど十字型に交叉しているのが印象的であった。第21回では，はじめて小さな女の子と雷の子どもに似せた男の子が登場した。ch はこの女の子を，公園の入口で迎えてくれるのだと説明した。こうして最近の回では，ch の箱庭は，より現実的な場面の表現が多くなり，同時に後述する母親の面接過程にも示されているように，思春期の芽ばえが感じられる。それと共に ch が箱庭製作に用いる時間が次第に短くなり，残り時間を他の遊び——人形劇，三輪車乗り——にも使うことが多くなった。

（3）母親のカウンセリング

ch が養護学校に転校後の1968年6月から筆者との面接が始まり，現在まで約20回に及んでいるが，初対面で非常に緊張の高い人であることが伺え，面接をはじめて，まず印象に残ったのは，発言途中に何度も咽に物がつかえたような咳をすることである。これは感情に流されることなく，よく整理され，秩序づけられた発言の奥に訴えたい欲求のあることを予測させた。

第 2 表

(回)	<作品内容の変遷>	(ケロヨン達の有無)
第1回	牧場近くの川辺と車の往来する街路の風景。	有
第2回	戦争の国と平和の村の風景。	有
第3回	アフリカの自然動物園，動物達が川に集まっている。	有
第4回	火山の爆発，溶岩が川を埋める。	有
第5回	火山の爆発，溶岩が湖を埋める。	有
第6回	八郎潟の干拓，造成地に住宅を建てる。	有
第7回	びわ湖の干拓，住宅，田んぼを作る。	無
第8回	びわ湖大橋とその付近の風景。	有
第9回	ケロヨン一家の集い，川向こうに自然動物園。	有
第10回	富士山とその付近の湖の風景。	有
第11回	湖の風景，一方鉄塔で遊ぶケロヨン達。	有
第12回	車の往来する街路。	有
第13回	郊外の住宅地風景。	有
第14回	出来上がった干拓地の利用 ——果樹園，植物園，遊園地，養豚場。	有
第15回	前回のと同様で，それのやや変形したもの。	有
第16回	上に同じ。	有
第17回	養魚場，弁天島のある浜名湖とその付近の風景。	無
第18回	Sand-play をしない。	
第19回	ひえい山とびわ湖と湖西鉄道。	無
第20回	利根川の干拓とその利用。	無
番　外	紀ノ川とそれにかかる鉄橋。	無
第21回	児島湾の干拓とその利用。	無

過　程　分　析

過程Ⅰ（1968年6月～1968年8月）では，前回面接から一週間の本児についての事実の報告が大部分を占めた。報告は，科学者に相応く全く客観的なもので，常に正常児との比較を頭に置き，冷静そのものの見方をしている。また，自分の感情をも客観的に対象化して報告している。カウンセラー（以下 co と略す）としては，最も基本的な「よく聞く」態度で接する他に，この冷静で理知的な母親を理解する方法はないように思われた。一方，母親は co に慣れるに従って緊張が取れ，relax した態度になったので，治療関係に期待がもてた。

過程Ⅱ（1968年9月～1969年2月）では，ほんの少しづつではあるが母親自身について，或いは母子関係についての発言が，よく統制された発言の隙間からこぼれ落ちるように述べられ，事実報告の場からようやくカウンセリングの軌道に乗った感がした。しかし，もう一歩自

分を出すというところで，強い防衛が働くようであった。何かを話さねばならないという，初期にみられた義務感というものから開放され，こういう場をもつことが「有難い」と述べていることから，カウンセリングの意義を感じていたと思われる。この時期に，はじめて母親と視線が合ったことも興味深い。

過程Ⅲ（1969年5月～1969年7月）は過程Ⅱから，coの病欠と春休みで二ケ月の空白があったために緊張が高まり，初期にみられた咳まで出現した。しかし，この両者とも比較的早く消夫し，「休みが長かったので不安な日々を送った」と訴えた。長期の休みが却って，カウンセリングへの動機を高めたようで，エネルギッシュな発言を毎回続けている。

さらに，人との交流に喜びを見つけ，父兄会の集りにも参加して，他の母親の話にも積極的に耳を傾ける姿勢を示している。

以上が，一年にわたるカウンセリングの過程である。次に ch の作った箱庭と関連すると思われる発言を抜萃してみる。

1968, 9, 14：一学期よりも ch の調子が良くなったと先生から言われた。学校ではみんなとうまく遊べるようになっていて，臨海学校にも適応した。

1968, 9, 21：ch の状態が悪くなったと先生から連絡があった。当面の問題は給食が食べられないこと。他人から批判されるのを非常に気にする。

1968, 9, 28：運動会の親子ダンスの練習に行ってきた。父親に対してはいつでも好きということはない。

1968, 12, 6：三学期は例年調子が悪くなるので，冬休み中に家庭でどうしてやればよいのか責任を感じる。放任になっても過保護になってもいけないと思う。ch の状態が良いので，何か仕事につきたい。

1969, 1, 17：冬休みをうまく乗り切れた。二学期の良い調子が続いている。

1969, 5, 9：春休み中に ch は目の前で指を動かす癖が出て心配した。先生は，ch に知識を与えようとされるので，少し負担ではないかと思う。

1969, 5, 23：思春期の傾向がみられる。「僕はXさんの心をとらえている」などという。学校で母の会があり，いろんな考えの人がいることがわかった。

1969, 5, 30：chは大学紛争に興味をもっている。野菜嫌いで食事の時にひと悶着する。

1969, 6, 13：ch は要求が通らないと代償を要求する。協調性がなく，級友とうまくゆかない。夏休みにキャンプに行かせようと思う。

1969, 7, 25：先生から知的レベルが高いのに比べ，生活習慣が身についていないといわれたが，親も知的なことの方が生活面より得意だ。最近，古事記を読んで神に興味をもっている。

考　　察

play therapy に箱庭をとり入れた時，すでに th である筆者と，十分な信頼関係ができていた ch は，第1回目の作品から，比較的まとまりのあるものを作っている。箱庭の作品からだけではとても自閉症児の作品であると思えないであろう。

本児の箱庭の第一の特徴は，第1回から第16回までほとんどの回に擬人化されたカエル「ケロヨン」と，その仲間達が登場していることである。このケロヨンは ch の自我の象徴であるとみることができる。はじめ半円形に並べられ，一回一回の中に見物人としてそっと置かれていたケロヨン達は，次第に力強さを増して，「干拓工事」の第6回には，その労働をうけおう存在にさえなってきている。回を重ねるにつれ，半円から円形に並べられるようになったケロヨン達に，充実へとむかう ch の自我が反映されているのではないかと思われた。

諸氏の経験において，本児にみられるケロヨンのように，作品の中に登場する ch を代弁するような存在物は，回が進むと消失してしまうことが多いといわれているが，本児の箱庭でも，第17回以降，このケロヨン達は姿を消した。そして，かわってより人間的要素の濃いトッポジージョや，人間の子どもなどが登場してきている。これは，第2表の作品内容の変遷を見てもわかるように，全体として，初期の頃の，どちらかといえば非現実的な ch の作品が，段々現実味をおびた，より具体的な作品にかわってきていることとも無関係ではないであろう。こうして作品を継列的に見ていくと，一つの作品を作り上げた力を踏み台にして，ch がさらに次の作品を発展的に生み出していることがよくわかる。

次に本児の箱庭の，橋の使用の特徴について考察してみたい。

「箱庭」においては，橋は一般に重要な意味をもつといわれている。[4] たとえば，周囲に対して心を閉ざしていた ch が，治療が進むにつれ，二つに区切られた土地に橋をかけたり，離れ島に橋をかけたり，いわゆる「渡河」，「橋を渡る」テーマの作品を作るようになり，それと共に問題が消えていったという事例がよくあげられる。橋は，ch が自ら関係をつけようとする気持，あるいはその可能性をあらわしていると考えられる。

本児は，第1回から頻繁に橋を使用した。ほとんど毎回川や湖に橋をかけ，幅の広いところには中継地を作ったり，二つ三つ橋をつないだりして念入りに橋をかけた。これは，本児がその内面に，周囲の人や物につながりを求める気持を有していることの一つのあらわれだと推測できないであろうか。既に著しい自閉症状はもたず，境界線領域に位置するような，本児ゆえに見られる一つの特徴であると思われる。

第三に，本児の作品の中に次々と変化してあらわれる「川」について考えてみる。

本児の場合，ほとんど毎回，川や湖，海などの水の情景がつくられている。第1回においては，一方が海につながった川がつくられた。これは，将来のより広い世界への発展を暗示しているようではあったが，掘り方が弱く，先端が形のはっきりしない消えいるようなものであった。ところが第3回には，この川は大河となり，周囲の土堤との区分もしっかりして，力強いものとなった。その後，川は湖に，あるいは海になり，次第に干拓され，宅地やその他の土地に利用されていった。ch は自由に砂を出し入れして量を決め，大胆に大きな湖を作ってはそれを再び砂で埋めていった。

エネルギーのあり方や，心の流動性を象徴すると思われる「川」の存在が，こうして本児の作品の中で，ダイナミックに変化していく様子は，前述したケロヨンの存在と共に，ch の進みゆく方向を示すものとして興味深い。

本児は箱庭遊びの中で，干拓工事を非常な熱心さで，時間をかけておこなった。

工事現場であるとか，土地の基礎がためをするような Sand play は，ch が自己の内的な世界の基監となるものを，掘り起こし，確立させていく意味深いものである。火山の創造，爆発をくりかえし，まず創世記のような世界を再現した後，非常に綿密に干拓作業を展開した ch は，この綿密な作業をとおして，一歩一歩成長への歩みを進めていったものと思われる。

干拓地作りをせっせとおこなった第6回，第7回以降，ch の作品は一段と活気に満ち，登場人物が箱庭狭しと移動，活躍する，流動的なものになった。この傾向はしばらく続き，第12回，13回のほっと一息つくような作品の後，今度は出来上がった干拓地の利用ということで，カラフルな箱庭が作られていったのである。第12回において，ほぼ中央に位置する道路が斜め十字型になっているのが，次のテーマ展開の暗示のようである。

干拓地を遊園地をはじめ植物園，果樹園，ぶた園（養豚場）などに利用したところは，ch の子どもらしい夢と生産性を象徴していて面白い。その後で，ch の具体的な体験も交えて作っている日本各地の川や湾，湖風景の表現が，一歩現実的な世界へ足を踏み入れた ch の現在を反映しているし，また，より具象的な男女の登場によって ch の思春期が箱庭の世界においてもはじまりつつあることが示されている。

本児は箱庭遊びをはじめてから，th への話しかけが多くなり，箱庭の説明に終始していた時から，最近では自分の日常の出来事，とりわけ喜怒哀楽を強く感じた事件を，th に話して聞かせるようになった。無表情で，奇異な抑揚の言語表現をしていた過去に比べ，情緒たっぷり，学校の先生や友だちのこと，遊びに行った時のこと，時事問題などを話すのである。かっては劇遊びの台詞や，とりとめない話題をさかんに口にしていた ch であるが，象徴的体験をへて次第に感情が開発され，豊かになってきたのであろうと思われる。

一方，母親のカウンセリングから言えることは，母親が比較的安定している日は，ch の Sand play でも安定がみられ，ch に偏食や級友との不和など，問題があると報告された時は，Sand play にもそれが反映されていると思われることである。さらに，母親は，知的レベルが高く，物事を客観的に見る習慣が，研究生活によって身についており，科学と非科学，正と誤りの区別が非常に強い。これが，母親をして他人から笑われる言動に出てはならない，との規範に縛りつけ，苦しめていると思われる。こういう規範の中にいることが，自分を苦しめている原因だとは自覚していない。懐妊して，仕方なく研究生活から離れたとのことで，現在も研究に対する郷愁をもち，主婦の座に満足していない。ch に対しては，知的能力の開発を望み，生活面に重点を置いていない。ch の良き理解者たらんと努力するが，或る程度までゆくと「私にはできない」と，それ以上の努力に乗り出せないでいる。

今後の方向としては，母親が自ら治療の雰囲気を十分に味わうことにより，ch に対する見方，接し方を変えていくことが考えられる。

以上，therapy と counseling の経過を分析し，考察してきたが，最後に，われわれの経験からいえることは，本児個有の能力もさることながら，概して Asperger type の自閉症児達には，play therapy に Sand-Play Technique をとり入れれば，より効果的な治療が期待できるであろうということである。箱庭という媒体が，従来の play room の設備では十分に表現し得ない

彼等の内的エネルギーを，有効に発散させ，さらに th にも，より良く ch を理解するのに役立つ場を提供するからである。もっとも，一事例のみでこのように結論づけることは早急であるので，今後とも経験を重ねて検討してみたいと思う。なお，ch の therapy と併行して，母親のカウンセリングが必要であることは論を待たないであろう。

要　　約

Aspeger type と思われる一自閉症児に試みた箱庭療法と，併せておこなった母親のカウンセリングから，われわれは以下のことを見出した。

(1) ch の作品には了解不能な，奇異なものは見られなかった。これは，既に th と信頼関係ができているということが一つの理由であろう。

(2) ch の作品には，毎回彼の自我の象徴とみられる擬人化された動物「ケロヨン」その他の一群が登場した。

(3) ch が作った劇的なテーマは「干拓工事」であった。彼はこの遊びを通して，自我を確立していったと思われる。

(4) ch の箱庭の内容は，次第に非現実的なものから現実的なものへ変わっていった。

(5) 箱庭療法による象徴的体験は，ch の感情を開発し，その素直な流出を容易にさせると思われる。

(6) ch の母親の態度は，客観的，知的であったが，カウンセリングを経験することにより，子どもに対する理解を深め，柔軟性を得た。今後も、カウンセリングを続けることにより，自己洞察を得ることが期待される。

文　　献

1) Jung, C. G., Psychological Types, Routledge & Kegan Paul LTD., 1923
2) Kalff, D. : The archtype as a healing Factor, Psychologia, 9 177-184, 1966
3) 河合隼雄，ユング心理学入門，培風館，1967
4) 河合隼雄編，箱庭療法入門，誠信書房，1969
5) Lowenfeld, M : The World Pictures of chidren, Brit, J. Med. Psychol., 18 65-101, 1939
6) 山松質文，音楽による心理療法，岩崎学術出版社，1966

Summary

The following observations were made through the play therapy with the Sand-Play Technique on an autistic child who seems to be of the Asperger type and through his mother's counseling.

1. The child experienced sand-play willingly and his products were not strange and curious. Probably it is considered that his products reflect the good relationship between his therapist and himself.
2. In every session, his products were characterized by some groups personified animals which seemed to be of his self image.
3. A dramatic theme of his products was "reclamation works" through which he seemed to be reforming himself.
4. The main contents of his sand-play changed from unrealistic to realistic ones.
5. It seems that the client's symbolic experiences through the sand-play helped the immediate expression of his feelings.
6. His mother's attitude had been very rigid, but during the course of counseling she developed understanding and flexible attitude to her child. It is expected that his mother's self-insight would be attained through the intensive counseling.